

<p>上演 11</p> <p>2022年8月 2日(月) 1校目</p> <p>中国 ブロック (島根県)</p> <p>島根県立 三刀屋 高等学校</p> <p>「永井隆物語」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(青森県) 青森県立木造高等学校</p> <p>成田 怜史</p>
--	---

「愛」を感じさせてくれた作品であった。私たちは原子爆弾の脅威を、亡くなった大勢の一人一人に物語があることを忘れてはならない。そう思わせてくれる作品だった。

物語は、長崎で被爆した放射線科の医師、「永井隆」の生涯を描いている。科学者であった永井さんは、人の肉体は一つの物質であり、死後は元素に戻るのみと悟っていた。しかし母の死をきっかけに、死んでなお残る魂がどこかにあるのではと考えるようになる。そして、後の妻「緑」との出会いが彼をカトリックへと導いた。

幕が上がると舞台奥に巨大な骨組みだけの装置が見える。劇中ではレントゲンを撮影する装置として使われていたが、講評委員の間では被爆して骨組みだけになった建物、あるいは原爆ドームのように見えたとの意見が挙がった。また、時折挟まれる語り部の小説のようなナレーションが物語への没入感を高めていた。

永井さんが結婚し、二人の子供を授かった時、日本は太平洋戦争を始めた。彼は自分の体が放射線に蝕まれることも厭わず、フィルム撮影より負荷が大きい直接透視で結核患者の診察を始めた。同じ頃、彼は家族と戦争が終わったらみんなで桃の缶詰を食べようと約束する。

整備士の市太郎さんが語った日本軍の兵器の真実は、永井さんのみならず観客の胸を抉った。ベニヤ板で震洋艇を量産して爆薬を積み、それを操縦する若者を訓練しているのだ。「知っていますか！」という市太郎さんの声が胸に刺さり、私は自国で起きていた悲惨な現実に関心が締め付けられた。

原子爆弾が投下され、舞台上の人々がロボットのようにゆっくりと倒れていくシーンは、原子爆弾の恐怖があまりと伝わってきた。立ち昇るスモークがキノコ雲のように見えて、リアリティーを増していた。原子爆弾が開発されていたことを知った時、科学者としての喜ばしい気持ちとそれ以上の愛する隣人を失った悲しみに葛藤する永井さんの姿に、客席からは啜り泣く声が聞こえた。

焼け跡になった家に戻り、台所で骨になった緑さんを見つけた時の描写は、永井さんの深い悲しみが痛いほど伝わってきた。彼女が持っていたロザリオを永井さんが握りしめた時、客席の啜り泣く声が一層大きくなった。永井さんが子供たちの所へ桃の缶詰を持ってきた時、私の脳裏に緑さんの姿と家族の約束が浮かび上がり、最後の二切れを食べるべき人がここにいないという現実、とても切ない気持ちになった。

当時の状況を知る人が減ってきている今、私たち後の世代がこの悲劇を知り、語り継いでいかなければならないと感じた。

戦争の記憶を後世に伝え、忘れないためにも、まずは知らなくてはならない。

誰にも伝わらないのだとしても、私は「永井隆」を知ることができてよかったと感じた。舞台を見終わったとき、どこからか鐘の音が聞こえたような気がした。